

六月から七月にかけての三八日間で一〇四試合を実施して終了した「二〇二六FIFAワールドカップ」は世界を興奮させて終了したが、これを国際経済事業と解釈すると興味のある数字が浮上してくる。北米の三カ国の会場で観戦した観客の合計は約三六〇万人で過去最高となり、経済効果は約三兆円と推定されている。モンゴル一国のGDPに匹敵する。

また「二〇二四パリオリンピック大会」は一七日間の開催で観客は一二〇〇万人、収入は八三〇〇億円であった。いずれも巨額の経済効果である。しかし今回、紹介したいのはスポーツの効果ではあるが、巨大な国家振興の競技としてではなく、スポーツによって日本の地域を発展させる効果をもたらしている事例である。

スポーツと地域の歴史のある関係は合宿である。戦前から利用されて有名な地域は長野県上田市の菅平高原で、昭和初期からスキーの合宿でも利用されてきたが、冷涼な気候がラグビーの合宿にも好適とされ、戦前から法政大学が夏季に合宿しはじめたことを発端に、現在ではスポーツ合宿の聖地と名付けられるほどである。

北海道網走市は人口三万人強の地方都市であるが、夏季でも気候が冷涼、陸上競技や球技のグラウンドが数多く存在、合宿で利用する場合は施設の使用が無料などの条件のため全国の大学などがラグビーやサッカーの合宿場所として年間一万人近くが利用している。その結果、地元への経済波及効果は三億円以上と推計されている。

これとは相違する土地の特性を宣伝してスポーツの合宿を誘致している地域もある。静岡県裾野市は名前のように標高一〇〇〇メートル以上の富士山麓にあるため長距離走の高地トレーニングの適地として注目され、冷涼な気候という条件も後押しし、クロスカントリーなどの合宿をする団体が最近では六〇以上になっている。

これら自然環境がスポーツに適合している地域でなくても地域発展にスポーツを利用する事例もある。埼玉県久喜市は東京都心まで五〇キロという通勤圏内にあるが、三人制バスケットボールがオリンピック種目になったことを契機に数多くのコートを整備し、ここを拠点とするプロチームも登場して地域振興の活動になっている。

広島県三次市は中国山地の中央にある立地も影響して人口は戦後の一〇万人から半減、とりわけ二〇代から三〇代の女性の減少が顕著であった。そこで女子野球の大会や合宿の誘致に努力し、二〇二〇年には「女子野球タウン」に認定され、二〇二三年には国際大会の開催にも成功して地域を元気にしている。

宮崎県新富町は人口一万六五〇〇人の農村地域で二〇〇〇年を頂点に人口は減少している。そこで女子サッカーを地域振興の手段にすべく二〇二〇年に女子サッカーチームを結成したところ驚異の成績で四年後には「なでしこリーグ一部」に昇格するまでになり、現在では様々なサッカー試合が開催される地域に変貌している。

二一世紀になって日本は人口減少時代に転換し、都道府県単位で人口が増加しているのは東京と沖縄のみである。この人口減少地域を発展させるのは国内国外からの流動人口であり、それを誘引する重要な要素が観光であるが、スポーツも有力な引力である。これまで健康増進の視点から注目されてきたスポーツを地域経済の視点から注目する時代の到来である。